國の爲めか』と。餘りの奇問に予は心中笑を禁ずる能はざりしも、故らに平然たるの狀を裝ひ答て曰く、『予の目的は遊覽に在り。豈他あらんや』と。領事又曰く、單に遊覽とは解すべからず、願くは詳細を聞くを得ん』と。予曰く、『新疆全部を旅行するのみ』。領事不滿の色を作して、『然らば塔爾巴哈臺に行かるゝや』、予曰く、『然り』領事尙ほ、『彼の地方は寂寞荒凉の境に屬し、別に觀るべきもの有らず』云々、予曰く『忠言を謝す。然れども寂寞の境、又如何なる妙趣あるやも知るべからす』。領事苦笑して止む。是に於てか、予試に問ふて曰く、『塔爾巴哈臺より露境に通ずる捷路を經て伊犂に到らんと欲す。貴官予の爲めに幸に一臂の勞を取るの好意なきや』と。領事聲に應じて「斷じて不可」と云ふ。後予が伊犂に達せし時、該領事の歸國を耳にせり。果して何の故たるを知らず。

予の烏魯木齊滯在は前後二十七日敢て少なしとせず此間伊犂將軍（長庚赴任途次當地滿城內滯在中）新疆巡撫（聯魁）布政使（王樹枏）を始め文武諸官は駕を狂げて遠征の勞を訪ひ宴を張りて孤客の情を慰め或は旅館の設備を爲し又前途の便宜を圖るなど、厚遇至らざる所なし、記して感謝の意を表す。